

アンケート用紙記載内容

染色結果について（現在の染色態度で満足ですか）

- 背景の非特異的反応（共染）
- 日常の検査ではMMの Bone marrow の標本を染色することが多く、その場合、には背景の共染が気になります
- ややリンパ節の被膜や間質に反応が来てしまい、DAB発色をやや押しすぎたかもしれません
- バックグランドが染色されてしまう
- しみ出しも染色されてしまう
- 消火管で κ 、 λ を染色する機会が多く、バックグランドがリンパ節の場合に比べると目立つことです。その際、コントロールは消化管の形質細胞の有るところ目安にしております
- バックグランドの共染
- 安定した結果がコンスタントに得られないことが多い。特に腫瘍細胞（形質細胞、リン球）

疑問質問

- 賦活化に酵素(Proteinase)を用いてもACを用いても、又、非特異ブロッキング処理をしても背景の共染が起きてしまう
- 背景の共染を血清の免疫グロブリンの染まりとしてOKするか、あくまでも共染として考えるか、そのとらえ方
- 今回のリンパ節炎において κ 、 λ を染色する意義
- DAKO社の物を使用していたが、非特異的反応が多く、信頼性に欠けていた。次にZYMED社の物を用いたがあまり変わらず、IMUNOTECH社の物を使用するようになった。
- バックグランドをおさえる有効な手段と他の施設の状態などとても興味深く思っております。このコンペを機会にプロナーゼによる消化処理、抗体の希釈倍率の検討を行いました。今回は従来施行していた条件で行いました。
- ホルマリン固定、パラフィン切片では間質や血管内、細胞間に存在する正常血清も反応してしまい、判定に苦慮することが多い。
- 抗原賦活化法や一次抗体の選択、濃度など一定の条件では難しく、症例によっては各々の検討が必要と思われます。